

「ルワンダの涙」

宮崎悠花（長崎・南島原市立深江中学校）

この夏、私はカナさんという一人の女性に、ワークショップで出会いました。十九歳のカナさんは、高校生の時にアフリカのルワンダという国に留学し、それ以来、ルワンダの子供たちとその親を支援する活動を行っています。

一九九〇年代に起きた内戦や大量虐殺で多くの血が流れた国、ルワンダ。内戦終結後は、農業改革やインフラ整備、IT産業の振興などにより「アフリカの奇跡」とも呼ばれた復興を果たした国として今は知られています。しかし、奇跡の復興を遂げた国と言われていても、いまだにそこでは涙が流れ続けています。働く場所に恵まれない若い母親たち。極度の貧困から、捨てられてしまう子供たち。学校にも行けず、字も書けず、働くすべを持つこともできず、やがて大人となっていく少女たち。カナさんは、そんなルワンダの子供たちの夢を叶えるために支援活動を行っている、と私に話してくれました。

ルワンダと日本の暮らしが、なぜこんなに違うのか私は深く考えさせられました。日本では大人になると働く場所が誰にでもあります。どんなに貧しくても、子供を捨てる親はいません。子供は誰でも学校で学ぶことができ、将来の夢に向かって必要な学習をしています。

日本には、どんな人でも安心して豊かに暮らせる社会がつくられていて、それは税によって支えられているということに気づきました。また、「累進課税制度」というものがあり、所得が多い豊かな人が多く税金を負担し、その分で所得が低い貧しい人の税負担を軽くしているのです。また、社会全体でお互いに生活を支えあう「社会保障」という制度があり、働く場所の確保や、親が働いている間の保育が必要な子供に対する保育サービスも充実しています。こうした社会保障制度の費用は、主に税金でまかなわれているのです。

私たち日本人が安心した生活が送れるのは、税金のおかげなのです。私たちが生きる現代社会は、人、もの、お金、情報が国境を越えて行き来するグローバル社会です。中学生の私は、カナさんのようにルワンダの現地で支援をすることはできませんが、ルワンダのことを思い、支援していく活動はできます。カナさんを通じて、ルワンダの子供たちに洋服や文房具を送ることができます。そして、この日本で税の制度に感謝しながら、一生懸命今を生き、将来、国際貢献できる大人になる力をつけていきたいです。ルワンダの子供たちの夢が叶い、うれし涙が流れることを祈りながら。